

海を診る

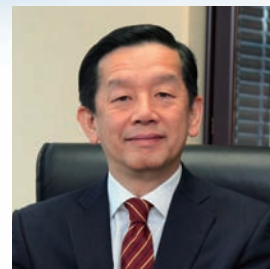
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産研究・教育機構 公開日: 2024-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中津, 達也 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009764

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



「海を診る」

所長 中津 達也



北の海は、水産物の宝庫です。まずは基礎生産が高い。栄養豊富な海のスープにコンブなどの海藻が繁茂し、魚やカニが大量に獲れます。しかも、どれもうまい。色鮮やかなサケやイクラ、焼くと脂がしたたる大ぶりのホッケの開き、濃厚な旨味の花咲ガニ、透き通ったスルメイカの刺身などをもたらす、多くの人々の憧れの海です。

しかし、このところ、北の海の恵みは陰りを見せています。何と言っても獲れないのです。北海道で最も漁獲量の多かったスケトウダラの不漁、北海道民の、いや、居酒屋愛好家のソウルフードであるホッケの不漁。また、昨年は、熊とともに北海道のシンボルであるサケの大不漁、最近では庶民の味方のスルメイカも高級魚となり、北の海はどうも悪くなっているようです。

これらの不漁の直接的な原因は、資源量の減少ですが、では、なぜ減少したかと言われると、簡単なようで大変難しい問題です。

北海道の漁業者は、行政機関からの指導も受け、少なくなった資源を獲り過ぎないように努力しているのに、なかなか資源が増えません。水産資源は、魴物などと違って再生産する資源と言われ、自ら増えていく特徴を持っているので、獲らなければ増える道理ですが、どうやら親がいても子が増えにくい、再生産がうまく行かない状況にあると考えられています。

このような状況となった要因の一つとして、地球温暖化やレジームシフト(数十年単位の気候変動)などが挙げられています。気象と同様、海洋の変化は一樣に水温が上がる訳ではなく、季節による水温の変化や海流の変化、極端気象、また、台風など陸域からの影響の変化など要因は様々です。例えば、昨年のサケ資源の減少には春先に稚魚期を過ごす沿岸域の水温が低かったことが、スルメイカ資源の減少には産卵場である東シナ海の水温が低かったことが要因の一つとして挙げられています。また、昨年、サンマが北海道沿岸に回遊しなかった原因としては、道東沖の暖水塊(暖かい海水の塊)の存在が指摘されています。

このため、この変化しつつある海的环境に適応した水産資源の管理、増大方策の開発が緊急に求められており、北海道区水産研究所では、北海道立総合研究機構、大学などとともに、全力で取り組んでいるところです。

私事ではありますが、年齢も五十歳をとうに過ぎて来ると体のどこかが思わしくなくなってきます。やみくもに健康食品に手を出すよりは、悪しき原因を調べる方が、科学的態度だといえます。さらに、加齢とともに癌になる可能性も

増加しますが、これには早期発見しかないそうです。とにかく、「診る」ことが肝要なのです。

北海道の豊かな水産資源が減少しているのは、北の海が変化して来ているからです。そうであれば、資源が減れば稚魚を放流する、暑さに強い魚を作る、などと言った対症療法に走りがちですが、原因を知らないで対処すると、たまたまうまく行くことはあっても根本的な解決にはつながらないでしょう。幸いにも、関連する科学技術の進展により、海流や水温など海の状態の把握と将来の予測、環境の変化が水産生物に与える影響など、これまで未知であった(orブラックボックスとされてきた)事柄が解明されつつあります。

豊かな「北の海」とこれからもうまく付き合っていくためには、まずは、徹底的な調査と解析により「海を診る」ことが重要であると強く思うところです。



写真1 8月某日の釧路和商市場の店頭から 不漁のホッケではなく 輸入もののシマホッケが幅をきかせていました

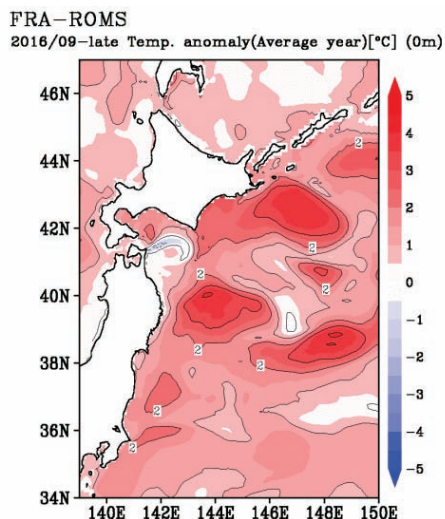


図1 FRA-ROMSによる2016年9月下旬の海面水温年偏差図
(<http://fm.dc.affrc.go.jp/fra-roms/>)